

第59回山陰小児外科内科・周産期研究会

日時：2024年2月10日(土) 午後1時30分～午後4時30分

会場：島根大学医学部キャンパス 看護学科棟1階 N11
出雲市塩冶町89-1

当番世話人：島根大学医学部附属病院小児外科 久守 孝司

1. 両側緊張性気胸とヘルニア再発を合併したが救命し得た重症先天性右横隔膜ヘルニアの1例

鳥取大学医学部附属病院 小児科

森脇 千咲, 吉岡 和樹, 藤井 宏美
今本 彩, 宮原 史子, 三浦 真澄
難波 範行

同 小児外科

高野 周一, 長谷川利路

妊娠30週に右先天性横隔膜ヘルニア (CDH) と診断された男児。日齢2に右CDH修復術を施行した。術後管理中に両側の緊張性気胸とCDH再発を合併し、治療に難渋し一時看取りの方針となりながらも、長期の胸腔ドレナージや慎重な循環管理によりCDH再修復術を施行でき、自宅退院した。重症右CDHは死亡率が高く、気胸は致死性の合併症の一つであるが、集学的治療により救命し得た。

2. 日齢16で発症した右先天性横隔膜ヘルニアの1例

鳥取大学医学部 消化器・小児外科学

増田 興我, 松永 知之, 高野 周一
長谷川利路, 藤原 義之

同 周産期・小児医学

吉岡 和樹, 横山 浩己, 難波 範行

生下時には特記事項のない男児。日齢13から不審な咳嗽あり。日齢16に不機嫌と血便を理由に近医受診。診察中に陥没呼吸を呈し始めたため当院搬送。体格は日齢相応。Xp, CTで右横隔膜ヘルニアと診断して鎮静・挿管後、緊急手術。開胸下で脱出した結腸と肝右葉を還納し、長楕円形のヘルニア門を直接縫合で閉鎖。20日後には退院可能となった。一般的な定義からは外れるが遅発性先天性横隔膜ヘルニアに相当する病態であった。

3. 食道異物に対する上部消化管内視鏡検査時に食道webと診断された12歳男児

松江赤十字病院 初期研修医

甲佐 勇陽

同 小児科

堀江 昭好, 石本 千夏, 原野 真一
真玉 千紘, 森藤 祐次, 長谷川有紀
藤脇 建久

同 感染症科

成相 昭吉

同 消化器内科

安藤 選人, 結城 崇史

12歳男児。2日前の夕食時から出現した胸のつかえ感と反復する嘔吐を主訴に当院救急外来を紹介受診した。問診で以前から時折胸のつかえ感があったと訴えた。単純CTで食道下部に異物が疑われ、翌日に行った上部消化管内視鏡検査で食道webと食道を塞ぐ鶏肉塊を認められた。食道webは食道内腔に発生する膜様構造物で上部消化管内視鏡施行例の5%前後で認められる疾患である。若年者で食道通過障害を認めた際には食道webも鑑別する必要がある。

4. 先天性食道閉鎖症根治術後、SIADHを伴う周期性嘔吐症を発症した一例

島根大学医学部附属病院

総合周産期母子医療センター

森山あいさ, 山本 慧, 吾郷 真子

同 小児科

舩金 聖也, 和田 啓介, 竹谷 健

同 小児外科

真子 絢子, 久守 孝司

9か月の男児。先天性食道閉鎖症に対して日齢0に胃瘻造設、日齢2に根治術を施行して、気管膜様部損傷と左声帯麻痺を合併した。生後3か月から低Na血症を伴う反復性嘔吐発作が出現、生後5か月に低Na血症に

よるけいれんも認めた。噴門形成術を行ったが周期的な嘔気が持続した。症状と諸検査から、周期性嘔吐症とSIADHと診断し、抗けいれん薬や漢方薬で治療を行っているが、症状が遷延している。

5. 臀部の dimple が発見の契機となった Currarino 症候群の 1 例

島根県立中央病院 小児科
平出 智裕
同 脳神経外科
根本 卓也, 井川 房夫
同 小児外科
久守 孝司

Currarino 症候群は、直腸肛門奇形、仙骨奇形、仙骨前腫瘤を三徴とする稀な疾患である。症例は生後6か月女児。4か月健診時、臀部に正中より左側に変位した縦長の dimple を認めたため紹介受診。腹部単純Xpで仙骨の部分欠損と、MRIで仙骨前に直径4cm大の脊髄髄膜瘤を認めた。強い便秘もあり、Currarino 症候群と診断した。その後、歩行障害が出現し、膀胱直腸障害も悪化したため、2歳時に腫瘤摘出術を行った。非典型的な殿部の dimple には注意が必要である。

6. 当院小児心臓血管外科10年間の歩み

島根大学医学部 循環器外科
城 麻衣子, 中田 朋宏, 末廣 章一
今井 健介, 清水 弘治, 和田 浩巳
山崎 和裕
同 小児科
安田 謙二, 中嶋 滋記

当院小児心臓血管外科は2023年10月で開設10年を迎えた。開設当初小児心臓血管外科医は一人体制で発足したが、現在二人体制となり、成人心臓血管外科チームや他科の協力を得ながら、山陰両県の先天性心疾患症例の手術を年平均50~60例行っている。当院における小児循環器チームの診療体制を示し、今後の展望及び課題を述べたいと思う。

7. 術前に先天性胆道拡張症を疑った I-cyst 型胆道閉鎖症の 1 例

島根大学医学部 消化器・総合外科
日高 匡章
NPO法人中国四国小児外科医療支援機構
石橋 脩一, 久守 孝司, 真子 絢子
船橋 功匡, 瀬名波英子

症例は日齢76の女児。出生前から肝門部の嚢胞性病変を指摘されていた。定期受診の血液検査異常で当科紹介。超音波検査、MRCPなどから先天性胆道拡張症(CBD)を疑い手術を施行した。胆道造影検査、胆汁採取より I-cyst 型胆道閉鎖症(I-cyst BA)と診断。嚢胞の摘除および総肝管空腸吻合術を施行し、術後経過は良好である。出生前の肝門部嚢胞性病変ではCBDだけでなく、BAの可能性を考慮し、黄疸や便色に注意した経過観察が必要である。

8. 胎児肺分画症による胸水貯留に対し胸腔シャント術を施行した一例

島根大学医学部 産科婦人科
楨原 貫, 皆本 敏子, 原賀 光
中川 恭子, 岡田 裕枝, 山下 瞳
石川 雅子, 折出 亜希, 金崎 春彦
京 哲

症例は36歳、妊娠23週に胎児胸水を指摘され、肺葉外肺分画症を疑った。胸水貯留のため妊娠25週、妊娠32週時に胎児胸腔羊水腔シャント術を施行した。胸水貯留のため妊娠35週2日に帝王切開術にて出生した。日齢3に肺葉外分画症切除術を施行し、気胸合併したが経過良好で日齢22日に退院した。胎児胸腔羊水腔シャント術により妊娠期間を延長でき、呼吸器合併症なく退院できた。胎児胸腔羊水腔シャント術が有用な症例を経験した。

9. サイトメガロウイルス IgM 陽性であった 3 症例

鳥取大学医学部 産科婦人科
松本 芽生, 原田 崇, 宮本 圭輔
柳樂 慶, 谷口 文紀

症例1: 胎児腹水を契機として羊水検査をうけたところ、先天性CMV感染と出生前診断された。症例2: 初期検査で提出されたCMV-IgG陰性、IgMは陽性であった。症例3: 配偶者がCMV感染症と診断されたことから、血清学的検査をうけたところCMV-IgG陰性、IgMは陽性であった。【結語】CMVの血清学的検査は偽陽性が少なくないことから、検査意義と診断精度を十分に説明した上で行うべきである。

【特別講演】

「周産期～小児期の腎不全外科診療」

国立病院機構岡山医療センター小児外科
高橋 雄介 先生